

ルターの宗教改革 Reformation

- 1) カトリック教会のあり方に対する根本的批判は、既に14世紀に始まっており、No.66 B面に記したように、ウィクリフ（イギリス）、フス（ボヘミア）、サヴォナローラ（フィレンツェ）などの命をかけた批判にもかかわらず、コンスタンツ公会議 ※ 1414-18 以降も有効な教会改革は行われることはなかった。ルネサンスの中で、エラスムスのようにキリスト教人文主義者の中には聖書研究を深めて教会の腐敗を批判する者もいた。【1: 】の失敗などにより教皇の権威は衰え、聖職者の中からも教皇庁批判と改革の声が上がり、世俗の支配者たちもこれを支援したので、宗教界は大きな転機を迎えた。

※ コンスタンツ公会議 1414-18 = **教会大分裂**を解決、フスの焚刑、教会改革などを決定。招集したのは神聖ローマ皇帝ジギスムント 位1411-37 10K

- 2) メディチ家出身の教皇【2: 】位1513-21 LeoX はサン=ピエトロ大聖堂 (No.96 B面) 改築の資金調達という名目で、「ローマの牝牛」であるドイツにおける※【3: 】しょくゆうじょうの販売を許可した。ローマ教皇のドイツでの贖宥状発売を引き受け、実際に「免償説教師」を村々に派遣したのはブランデンブルク選帝侯の子のアルブレヒトであった。アルブレヒトは1514年にマインツ大司教に選任されたが、その時ローマ教皇に納める金をフッガー家から借金しており、その返済に迫られていた。「免償説教師」にはフッガー家の番頭が付き添い、売り上げの半分はローマ教皇のもとに送られ、半分はフッガー家のものとなる約束だった。「免償説教師」は「**金銭が献金箱の中へ投げ入れられてちゃりんと鳴るやいなや、魂は(煉獄から)飛び出す**」などと言葉巧みに人々の購買欲をかきたてた。ルターが憤慨したのも無理はない。

漢字チェック：**贖宥**状

※ドイツ人が「ローマの牝牛めすうし」と言われたのはなぜ? ……当時、イギリス、フランスなどは国家統一が進み、教会の所領に対しても国王は課税権を主張するようになっており、ローマ教皇はかつてのようにはたやすく資金を集めることはできなかった。ドイツでは、神聖ローマ帝国皇帝の支配は形だけで、多くの領邦(ラント)に分裂していた。世俗諸侯の領邦だけではなく、大司教や司教などの聖職者の所領も多く、それらはローマ教会の基盤であった。**分裂状態のドイツはローマ教皇の搾取の絶好のターゲットに**されていた! 牝牛ではミルクを搾れない。

16世紀にルネサンスの中心地がローマに移り、ローマ教皇はその保護者としての出費を必要とするようになった。教皇レオ10世は、サン=ピエトロ大聖堂の改築のためにドイツに目をつけ、教会領への課税を強めるとともに、贖宥状の発売などで農民からお金を巻き上げた。1517年にルターが宗教改革の烽火を上げると、ドイツの農民が熱心にルターを支持したのは、このような背景があったからである。

- 3) 1517年、ヴィッテンベルク大学神学教授【4: 】1483-1546 Martin Ruther は、ローマ教皇の許可した【3】販売に疑問を投げかける【5: 】を発表した。これを起点とする一連のカトリックへの批判・改革運動の総称を【6: 】(Reformation)と呼ぶ。ただし、**ルターは1517年の時点では、教会を否定するつもりも教皇と対立するつもりもなかった。**

絵画名称不明。このようなリュートを弾くルターの姿は、後世(17世紀以降)よく描かれた。なお、ルターは苦学生の間、街頭でリュートを弾きながら歌い、学費を稼いでいたと言われている。

リュートを弾くルター

『九十五カ条の論題』は、一般庶民には読めないラテン語で書かれ、ヴィッテンベルク教会の木の門扉に貼り付けるという方法で発表された。これは当時の神学論争ではごく普通の方法だった。この文章はドイツ語に訳され活版印刷されて全ドイツに広まった。この門扉は1760年に焼失した。

贖宥状の販売の背景には、《教会への喜捨などの善行を積み、その功績によって過去におかした罪も赦される》(山川出版社『詳説世界史』p209)という認識がある。これが正しいかどうかは、神学上の非常に根源的な問題である。

これについてルターは、《**金銭、善行、儀式によっては魂の救済はできない! 魂の救済は「悔い改め」と福音への信仰によってのみ行われる**》と考えた。これを、「【7: 】」しんこうぎにんせつという。『九十五カ条の論題』は、この論題について純粋に神学上の論争として、公開の場での討論を呼びかけるものだった。

「人は信仰によってのみ義 ※ とされる」という信仰義認説はルターのオリジナルではない。その初出は、なんと使徒パウロ ?-AD60以降の神学であり、ローマ末期最大の教父**アウグスティヌス (354-430)**に受け継がれ、ルターに至った。

※キリスト教における義(もちろんこれは日本語訳)は、義(ただ)しいという意味。真に義であるのは神のみだが、人間は神を信じることに於いて義(ただ)しさに近づくことはできる。ここまでは従来の説と同じ。ルターは人が行動において義とされること(行為義認)を否定し、信仰によってのみ人が義とされる(信仰義認)と考え、それまでのキリスト教で行われていた苦行、断食などを否定した。だから贖宥状を購入する行為は、義とされることなどありえない。

一般に、当時のキリスト教では罪はこのように許される。①《罪を自覚し反省する》→②《聖職者に告戒する》→③《許しを得た後、罪の償いをする》この③の償いを軽減する行為が贖宥である。十字軍に従軍する兵士に贖宥を行ったのが起源とされる。「免罪符」は、いかに酷い誤訳であるか分かるだろう。

ルターは贖宥自体を否定したのではなく、上記①②を飛ばして贖宥状の購入で罪が許されるなどということは神学上あり得ないと考えそれを率直に述べた。これが全ヨーロッパを動かす影響力を持つとは本人も思っていなかったであろう。

なお、贖宥状の販売はトリエント公会議 1545-63 の決議で禁止されたが、贖宥状の発行自体は禁止されなかった。

- 4) ルターは、1519年、ローマ教皇の差し向けた論客エックとライブツィヒで公開討論した。エックの巧みな誘導で「フスの信条のなかに、あきらかにキリスト的で福音的なものを、私はたくさん見つけた」「公会議も誤ることがある」などと述べてしまう。このころにはルターは決意を固めていた。「信仰のよりどころは【8: 】である」として、**教皇権や教会**

